

ハイデルベルク信仰問答より

問 54 「聖なる公同の教会」ということについて、あなたは何を信じますか。

答え 世のはじめから終りまで、全人類の中から（創世 26:3b-4、黙示 5:9）、神の御子は（コロサイ 1:18）、御霊と御言葉によって（イザヤ 59:21）、真の信仰において一つなるものとして（使徒 13:47-48、エペソ 4:3-6、5:25-27）、永遠の生命のために選んだ群れを、ご自分のために集め、守り、保ってくださる、ということ信じるのであります。さらに、私はその群れの生ける肢であり、永遠に肢でありつづけるであろう（ヨハネ 10:28）、ということ信じるのであります。

前回から「聖霊論」に入りましたが、今日は使徒信条の「聖なる公同の教会（を信ず）」の部分扱われています。これを告白するとき、私たちは感覚として少し違和感を覚えたことがないでしょうか。ここでは「教会を信ずる」と言われているのであって、「神を信ずる」とは言われていないのです。この問題は、続く「聖徒の交わり（を信ず）」にも通じています。その先の「罪の赦し」「からだの甦り」「とこしえのいのち」はすんなりと理解できても、「教会」「聖徒の交わり」に関してはどこかザラつく感触を覚えるのです。今日は本問答の「答え」から、この告白の意味を考えてみましょう。

まず「聖なる公同の教会」を分解してみると、「聖なる」「公同の」「教会」と三つの要素から成っていることが分かります。後ろから見ていきますと、「教会」とは「集会」「集まり」を意味する「エクレシア」というギリシャ語から来ており、元々宗教的な意味はありませんでした。主イエスが「この岩の上にわたしの教会を建てる」（マタイ 16:18）と言われたところからキリスト教特有の用語になったと言われます。教会とは建物を指すのではなく、「信者の集まり」「同じ信仰に立つ者たちの群れ」と理解することができるでしょう。

「公同の」とは「キャソリック」という言葉であり、「普遍的な」「どこでも同じであること」を意味します。今でこそ「カトリック」「プロテスタント」と教派を分ける意味で用いられる傾向がありますが、本来は「いつの時代にあっても、どの地域においても、同じ信仰を持っていること」を意味する言葉です。この「公同の教会」が表す範囲は広く、歴史を貫いて人類史の最初期から神の恵みに生きたすべての人を含んでいると言えます。既に天に召された人も、現在地上で信仰に生きている人も、神の御前では一つなのです。

「聖なる」とは、「聖別する」を意味し、神のものとするために他のものから区別することを表します。罪の世から取り出し、聖なる神の許に置かれるのです。この「聖別」を実現させてくださるのは聖霊にほかならず、罪の赦し、罪の聖めを通して私たちは神のものとなされました。聖霊を有する者となったことが、「聖なる公同の教会」の一員とされたということなのです。

以上のことを踏まえた上で、「答え」を読んでみましょう。「世のはじめから終りまで、全人類の中から（共同の）、神の御子は、御霊と御言葉によって（聖なる）、真の信仰において一つなるものとして（共同の）、永遠の生命のために選んだ群れを、ご自分のために集め（教会）、守り、保ってくださる」。「御霊と御言葉」は常に共にあり、聖霊が働かれるところで御言葉が語られ、それが聞く人によって理解され、受け入れられ、信仰告白へと導かれます。そして主イエスは、そのようにしてご自分を信じた人々を、「キリストのからだなる教会」として永遠に守り続けてくださるのです。その守りと養いの中にある一本の枝として私たちはつながれているのですから、「私はその群れの生ける肢であり、永遠に肢でありつづける」と確信をもって言うことができるのです。

これらのことを念頭に置いて、もう一度「聖なる共同の教会を信ず」と告白してみましょう。結局「教会を信ずる」とは、教会をご自身のからだとしてくださっている主イエスを信じることなのであり、私たちが永遠に捨てることのない主の恵みを信じることにほかなりません。

私たちのからだに置き換えて考えてみましょう。私たちは自分の手足、目・鼻・口・耳、体内の臓器、どれを取っても「要らない」とは言えないはずです。その一つひとつがあってこそその「私」なのであって、どれも尊い器官なのです。同様に、主イエスは私たち一人ひとりをもそのような存在として見てくださっています。

確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。もし、からだ全体が目であつたら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであつたら、どこでかぐのでしょうか。しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。もし、全部がただ一つの器官であつたら、からだはいったいどこにあるのでしょうか。しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない」と言うこともできません。それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。（I コリント12:14-22）